

今月の聖句

『あなたを照らす光は昇り
 主の栄光はあなたの上に輝く。』
 (イザヤ書 第60章1節)

◎1月の予定

- 6日(水) 教務委員会・教職員協議会
- 7日(木) 3学期始業礼拝 聖書教室
- 7日(木)・8日(金) 入学願書受付(小)

転入学願書受付(小・中)

- 8日(金) 給食開始
- 13日(水)・14日(木) 入学願書受付(中)
- 15日(金) 自宅学習日(小)
- 15日(金)・16日(土) 小学校入学考査②
- 21日(木) 教務委員会
- 26日(月) 身体計測(小・中)
- 28日(木) 教職員協議会

◎2月の予定

- 5日(金) 自宅学習日(中)
- 5日(金)・6日(土) 中学校入学考査

お知らせ

産休に入りました清水養護教諭に
 代わり、2月1日より上川隆子さん
 (看護師)が着任されます。



今年度のクリスマス祝会は「光」をテーマに装飾や聖劇を考え、小中それぞれの役割を担いました。



第54回
 神奈川県中学校美術展
 「優良賞」
 中2 古川 有記

あけましておめでとごいいます



○学校の様子

冬休みが明けて、児童生徒が学校に登校してきました。こんな不安な毎日ですが、話を聞いてみると、お休みの間、自宅でコマ回しやカルタをした児童、百人一首の大会に向けて、自宅で真剣に練習した生徒など様々でした。

中学校ではクラス対抗「百人一首大会」が開催される予定でしたが、緊急事態宣言発出の為、中止となりました。今年は、各クラスで距離を取りながら練習の成果を発揮します。合わせて「書初め」も行われます。休みの間に決めた言葉をしっかりと、したためました。

○持久走 28日～2月3日

毎年、年明けに開催するマラソン大会も、残念ながら中止になりました。今年は体育の授業で、大会と同じ距離を走り、タイムを記録します。保護者の参観はできません。小学1・2年生(1.2km)、小学3・4年生(1.7km)、小学5・6年生(2.2km)、中学生(3.4km)を走ります。当日に向けて、大会と同じ気持ちで練習を始めました。世の中では、コロナ禍の中で体力低下が心配されていますが、ステパノの子ども達は元気いっぱいです。一人ひとりが体調を整え、持てる力を全て出し切って走りぬけて欲しいです。

「本当は」

学園長 小川 正 夫

二十一世紀に入り二十一年目。迎える十年を始めようとしている大磯の聖ステパノ学園は、春の日差しのような温かさに包まれて平和な年の初めを迎えていましたが、コロナ感染症パンデミックで辛い毎日を送っている人達、職や収入を失うばかりか、住むところまで失い、困難な状況にある人達を想うと胸が痛みます。「新年おめでとうございませう」という言葉を口にするのがとても重く感じられます。年の初めなのに、この非常事態が一日も早く終わってほしいという思いでいっぱいです。医療に携わる方々の献身的な毎日の働き、自分のことよりも、困難な状況にある人達への献身的な奉仕の姿には、有難うございますと、心より頭が下がります。

昨年初めのころ、アメリカやヨーロッパで生活している日本人が、マスクをしていたため、感染症を持ち込む者という偏見から、街なかで暴力を振るわれたり、こともあろうに一国の大統領までが、強い指導者をアピールしようとしてマスクをつけることに反対をしたが、今は、世界中の人々が、ウイルスを感染させない、そして感染しないようにとマスクをしています。また、世界では感染症確定者数が八千五百万人。亡くなった人は千八百五十万人という統計を目にしています。

本当はどうすればよかったのでしょうか。就職に就き、初めて三年生を担任した児童で、今は医療機関に携わる世界的な科学者がいて、いつも年賀状を頂のですが、今年の想いにこんな言葉がありました。

「医学を含めた科学の発展は目覚ましいように見えますが科学が自然界に対してなしていることはほんのわずかであることを改めて認識させられました」と謙虚な言葉がありました。私達はよく、「本当は」という言葉を耳にし、口にします。「本当は、こうしなければならぬけれど」「本当は、してはいけないのだけれど」「本当は、あつてはならないことだけれど」「本当は、手を差し伸べるべきだけれど」「本当は、我慢しなければいけないのだけれど」「本当は誰とでも仲よくしなければいけないのだけれど」「本当は」に「でも」が付きがちです。いったい「本当は」という言葉の持つ意味はどういうことなのでしょう。

「理想をいえば」ということでしようか、「現実的ではない」という意味でしょうか、「そうかもしれないけれど無理」という意味なのでしょう。か、「言い訳に使う言葉」でしょうか、「建前と本音は違う」ということでしょうか。私が旧制の中学一年生だったころ、三学期の初めの日、正月の正の意味は、スタートライン「一」の前に立ち「止」まり、確り目標を見定めることだと教わったことがあります。「本当は」とは建設的に正しい判断をする、「本質は」ということではないかと思えます。

その為には勇気が必要です。ただ待っていて、誰かが解決してくれるだろうという考えでは前に進まないと思えます。

私達の学校、聖ステパノ学園が目指す教育の姿勢が、「本当は」どこにあるのかと、いま考えてみる必要があります。なぜ多くの人達が私達の学校、聖ステパノ学園に対して、想像以上の大きな支援をしてくださったのか、真摯に何度でも考え、その思いに応える必要があります。

知名度に沿って一般の私立学校に肩を並べる学校を目指して舵を切りなおすのか、志願者の増加が学校の実力なのか、子ども達一人ひとりに必要な教育者として私達が選ばれているという考えから、私達が子ども達を選抜していくようになるか、子ども達を第一に考えるより、教職員の負担軽減を優先に働き方改革を考える方向に舵を切っていくのかは、「本当は」「聖ステパノ学園の教育で整える姿勢は」と考えてみればよく分かります。

情報が氾濫し、何が本当なのか判断することが難しい世の中ですが、確り考え、「本当は」こうあるべきだと判断したら、本当を実行する勇気を持つことが大切だと思います。子ども達一人ひとりが、幸せだと思えるような、自分の将来を自分でつかみ取ることができるような心の成長を手助けしながら「本当は」に「でも」をつけないで、本当はこうあるべきだと思えることを実行する勇気を持つ一年にしたいと思えます。

静かな心で

事務長 中林 三平

聖ステパノ学園では、会議などが行われる時にお祈りをもって会を始め、お祈りをもって会を閉じています。閉会の祈りの一節に次のような言葉があります。

改めるべきところは改め、

守るべきところは守る

勇気と英知をお与えください

この祈りがどのようにして定められたのかは知りませんが、おそらく原典と思われる有名なお祈りがあります。

主よ、

変えられないものを受け入れる

心の静けさと

変えられるものを変える勇気と

その両者を見分ける英知を与え給え。

これは米国の神学者のラインホルド・ニーバーが作者とされているお祈りです。日本語訳は様々なものがありますが、ここに示したものは渡辺和子さんが訳されたものです。

ここで訳者を明記したのは、このお祈りに様々な訳文があり、少しずつ違う箇所があるからです。その違いによって、私たちが受け取る祈りの心は少しずつ違います。例えば、この祈りが日本で広く知られるようになった大木英夫さんの訳では、神様への呼びかけの次に「変えることのできるもの・」が来て

おり、原文とは順番が逆になっています。私には、これによって原文が持つ「出来ないことを受け入れる」ことを第一とした自省的な雰囲気がいぶん変わってしまったように思えます。「変えること」を積極的に推奨し、無理なことは仕方なく受容するというような祈りになってしまったのではないのでしょうか。また、「原文」と言われるものの中にもいくつかの違いがあります。日本語は主語を明記しない特徴があるため、渡辺和子さんの訳では、誰が祈っているのか、心の静けさや勇気・英知を願っているのは誰なのかがはっきりしません。原文では、これは「私たち」(：grant us)となつています。しかし、英文として引用されているものの中には「私」(：grant me)となつているものも時々あります。私にとつて、これはとても大きな違いです。自分のための祈りなのか、それとも共に世界に生きていく人たちが全てのための祈りなのか違つてきてしまうと思います。

さて、「変えられないもの」とは一体何でしょうか。色々なものが思い浮かぶでしょう。多分、皆に共通しているものは「過去」ではないでしょうか。このお祈りの素晴らしいところは、自分の過去、身の回りの人々の過去を思い出したときに、それを悔んだり、過剰に懐かしんだりすることなく、変えられないものとして静かな心で受け入れられるようにしてくださいと望んでいることです。

私たちは多かれ少なかれ過去との関係の中

で生きています。過去の失敗や、悔しかったこと、悲しかったことを思い出し、反省することでもう少し良い生き方ができるようになつていきます。また、大成功の経験、楽しかったこと、嬉しかったことを思い出すことで元氣が出てくることもあるでしょう。「心の静けさ」と共にこのような過去を「受け入れる」とはどのようなことでしょうか。それは決して過去を忘れるということではありません。良い思い出であっても、悪い思い出であっても「受け入れる」のです。

「心の静けさ」にはSerenityという単語が使われています。あまり使われない単語ですが、「心が平穏な様子」を意味しています。もう少し細かな意味を追いかけると、「ストレスや感情に左右されない精神状態」とあります。過去を思い出すときに、感情にとらわれず冷静に受け入れることができたなら何が起きるでしょうか。

「変えられる」ものの最も身近なものは「自分」でしょう。過去を静かな心で思い出して、そこから得られた喜びや反省を通じて、自分を変えていく方向が見えてくるでしょう。ただ、自分を変えるのは結構大変なことで、そのためにはやはり勇気が必要です。

聖ステパノ学園の十二月の生活努力目標は「静かな心で生活しましょう」というものでした。庭や廊下で賑やかにしている子どもたちにも心静かに学園生活を振り返る時間を与えたいと願っています。

私の家族に、病院で子どもたちの心を支える仕事をしている者がいます。ある日、入院生活を送る子どもに寄り添うときは何を大切にしていいのか聞いてみました。子どもの話を聞くこと、そばにいること……もちろん一つには絞れませんが「コントロール感」という言葉もキーワードになるそうです。

たくさんの治療や手術、制限される勉強に遊び。回復のためとはいえ、指示されるままに行動が決められていくストレスは、まるで自分が自分のものではなくっていくような感覚を子どもたちに植えつけ、その後の成長にも影響が出かねないそうです。

とはいえ、治療については専門的な医療のことですから当人には選べないことばかりのように思えます。しかし、例えばお医者さんから病気の説明を受けるときに「だれと一緒にそれを聞きたいか」、痛みを伴う治療を受けるときに「何があればがんばれそうか」など、子どもの心に寄り添って考えれば、彼らが決められることもたくさんあるそうです。

受身の治療を通して「病気が治った」と思うだけではない。葛藤や痛みの乗りこえ方を自分で考えて「ぼくは病気を克服できた」と思うことができれば、退院後の生活も自信を持って前向きに過ごせる。自分のことを自

分で決めているという感覚、コントロール感を持つことには、そんな力があるようです。

大変面白い話でしたし、これは他でもあてはまることだと思いました。授業はもちろん、教室でのちょっとしたやりとりの中、一方的な指示ばかり出して、子どもが自分で決める機会をうばうことはしていないだろうか。思わず頭の中で反省会を始めてしまいました。

withコロナで過ごしたこの一年、子どもたちのコントロール感は窮地に追いやられていたと思います。突然の休校、一方的に送られてくる課題、登校再開後も制限される部活に行事。「なんで子どもの意見を聞かずに休校を決めるんだ」という声を、現場でもテレビでも耳にしました。今も続く百年に一度の未曾有の危機、私たちは定められた安全のルールを守ることに精一杯の日々を送っています。しかしそんな中にあってもよく目を凝らせば、それぞれが選べとれる道はあるはずで、それがどんなに些細な選択に見えても、一つひとつ大切にしなければなりません。

それに気づいたのは、休校期間中の課題が返ってきた頃。当時は授業動画づくりに毎日追われていたのですが、意外にも子どもたちから一番反響があったのは、ABCの三コースから選べる英作文プリントでした。コースは難易度でわけ、例えばAコースは全部自分で書くけれど、Cコースは自分の考えに近い言葉を選んでいけば英作文が完成するようにしました。英作文が得意な子も苦手な子も、

一人ひとりが「これに挑戦しよう」「これなら自分にもできる」と思えるようにするにはどうしたらよいかと試行錯誤したものでした。

返送されてきた作文はおもしろいものばかり。中には全コースに挑戦した子もいました。自信がないからCコースに取り組んだけれど、段々とわかってきたから他にも挑戦してみたとのこと。自分で考えた新しい選択肢です。

課題の中の小さな選択ですが、休校明けに「ただ送られてくるものより、自分で選んだ勉強はやる気が出た」「本当にがんばって書いてたんです！」と子どもが話しているのを聞いた時、大きな事態にあっても、こうした選択を積み重ねることが大切なのだと思います。「コロナ禍での勉強、大変だったね」と思うのか。「コロナ禍でも、ぼくたち私たちは、がんばって勉強したね」と思うのか。それは彼らが日々のコントロール感をどれほど得られるかにかかっているのかもしれない。

子どもたちとも相談をして、休校後の教室授業でもABCの三コースから選ぶ課題学習を定期的に行うことにしました。自分にあった学び方を選びながら、長文の要約や英文スピーチなど、難しい課題にも子どもたちはたくましく取り組んでいます。

今年度は受身ばかりでなく自分たちで動く姿勢が、教員にも求められているように感じます。三学期も引き続き子どもたちと共に、ステパノらしく新たな挑戦を選び取る日々を送りたいと思います。

リレー原稿 つないできたリレーは、今回の松村教諭でひとまず終了です。

教諭 松村 はるか

コロナ禍。安易に口にするこすらはばかられるようなこの艱難を通して、神さまが私たちに問うていることは何か。人類の英知をはるかに超えた問いですが、私たちは常にこの問いを心に秘め続けなければなりません。

日々報道される感染者数とそれに伴う死者数。これは、抽象的な統計数字ではなく、「いのち」の問題です。そして、教室には「いのち」が存在し、そして、どの「いのち」も、自ら成長することを望んでいます。成長させてくださるのは神であり、まさに今、私たちは、心静かにその御声に耳を傾ける機会を、否応なく与えられています。

集まりに制限がかり、ささやかな日常が消え、実感するのは、子どもたちがいかに「つながり」を求めているかということです。アニメ「鬼滅の刃」が人気を博しています。誰が敵なのかわからないという物語構成が、現代の世相と相まって、「失っても、戦い続ける」というテーマが、人々の心をとらえているようです。

この危機にあつて、直面するのは社会のいたるところにはびこる「利己主義」です。経済格差が広がり、自己責任論がますます力を増す中で、私たちは、立ち止まることを求められているのかもしれない。

社会で「正しい」とされてきたことは本当に「正しい」のか。多角的な視点と多様性を、私たちは喜んで受け入れ合わなければなりません。生き方を問われ、人格を問われていると感じます。神さまの確かな御声に耳を傾けるか否かは、端的に、私たち次第なのです。私たちは、生きていかなければなりません。たとえ、どんなに傷ついても。そして、生きていくために私たちが求めてやまないのは、人と人との「つながり」なのです。なぜなら、私たちは「痛みを分かち合う」というこの上ないお恵みを与えられているからです。新しい年の始まりに、神さまからのお恵みを深く味わいたいと思います。

心と体の相談室

学習と心理

スクールカウンセラー 山口 滋美

相談室では毎年「どのような相談が多かったか」という統計を取っています。それを見ると、最近「学習（勉強）に関する相談」が増えています。中学生自身から「英語や数学が難しく困っている」という相談もあります。多くは親御さんからの「分かる・出来る」という気持ちを持ちつたためには、どうしたらよいか」という相談です。

答えは簡単です。その子がちよつと頑張れば出来る課題を用意し、「出来た、出来た」という体験を繰り返すことです。教師であれば

誰でも実感していることですが、心理学的にもれつきとした裏づけがあります。ロシアの心理学者レフ・ヴィゴツキーが提唱した「発達の最近接領域」がそれにあたります。発達の最近接領域とは、子どもがある課題を独力で解決できる知能水準と、大人の指導や自分より能力のある仲間との共同なら解決できる知能の発達水準のへだたりのことで、このへだたりはやがては独力で解決が可能となる知的発達の可能性の領域を意味しています。つまり「次の発達の領域」とか「次に続く発達の領域」という意味合いです。そしてヴィゴツキーは、子どもの知的発達を促す教育は「いままさに成熟しつつある可能性の領域の前を行き、そこにこそはたらきかけるべきである」と提起しています。「現在の発達水準」と「明日の発達水準」の間にあるものが、その子にとっての「今の課題」となるわけです。それをどれだけ適切に用意できるかが、子ども「分かる・出来る」の鍵となります。それには、その子の「現在」と「明日」をしっかりと把握し、「成熟しつつある可能性の領域」つまり「ちよつと頑張ればできる課題」を設定し用意することです。実はここが最も難しく、最もやりがいのある醍醐味のある仕事です。

どの子にも「明日の発達水準」があるというヴィゴツキーの信念を支えに、これからも相談活動をおこなっていきたいと思います。

「小学校」初めての「動画で祝うクリスマス祝会」でした。寂しいと思う大人を尻目に、しっかりと楽しんでいた子ども達の感想をご覧ください。

きょうクリスマスらしいのあとに、せいげきのどうがをみました。おもしろかったです。てんしがでてきたのがすごいです。

三ねんせいのつりーがかわいかったです。四ねんせいのつりーはめちやくちやかわいかったです。つりーがきれいだったので、すこくすてきだとおもいました。(小1 SM)

クリスマスしゅくかいのどうがを見ました。えんぎがじょうずでした。えいごもべんきょうになりました。五年生のプラバンもすてきでした。リースもきれいでした。三年生のクリスマスツリーもきれいでした。(小2 SR)

きょうは、クリスマスの礼拝をして、クラスで聖げきの動画を見ました。映画みたいでした。天使とガブリエルも出てきて、天使はとてもきれいでした。ガブリエルのいしろうもとてもすてきでした。マリアとヨセフも出てきて、私は、マリアの役をやってみたくて思いました。

教室に山口先生も来てくれて、いっしょに見ました。最後の「お・わ・り！」というセリフのところ、クラスみんなで楽しくなつて、アハハと笑いました。(小3 UM)

今日、学校で聖劇動画を見ました。小三から中三まであって、二本もありました。しかも一本目の最ごに『つづく』というのがあっておもしろかったです。中学生はイエス様の小屋も作って六年生が作ったあかりもあってきれいかったです。(小4 IN)

今日、クリスマス祝会がありました。まず、小三から中学生のクリスマスの作品を動画やスライドショーで観ました。どの学年もすてきな作品で、皆でクリスマス、イエス様のおたんじょうを祝っていると感じて、いいなと思いました。そして、中学生が作ったクリブは、ぜひ、夜に見てみたいです。

その次に、中学生のげきを観ました。今はコロナなので、役をえんじている人は役の動きをやって、言葉は全てナレーターの人がやっていたので、アフレコみたいで新鮮でした。少しカットされている場面もありましたが、イエス様のおたんじょうが良くわかる良かったです。(小5 IH)

小三、小四、小五：次々と並べられるかざり、最初に見た時私は、なんてキレイなのだろうと思いました。

中学校はクリブを作っていて、小六はその下にペットボトルのあかりを置いていました。私は一つ一つの作品を重ねてみると、こんなに素敵に、キレイになっているのかと思います。

感動しました。

一つ一つの努力が、こんなにもなるとは一人一人の思いが、伝わってくる

少し笑える所も、面白く、楽しい時も、皆の力で作られているのはスゴいことだと思いました。

イエス様がお生まれになったのが一番のプレゼントだということを改めて感じました。(小5 MH)

今日は、クリスマス礼拝の後、聖げきの観しようをしました。中学生がげきをやっていてすごかったです。げきでセリフを言わずに、後から録音(?)をしていたのが、工夫があるなあ、と思いました。後、ナレーションさんが話す時、横に火がめらめらしていたのが印象的でした。来年は、自分達もやれたらいいなと思いました。あと、装飾の動画で、中学生と六年生の組み合わせがすごくキレイで良かったです。(小6 OH)

今日は、クリスマスの動画を見ました。まず、最初はクリスマスのかざりの動画を見ました。どの学年もがんばっていて、とてもきれいでした。次に中学生のせいげきを見ました。コロナで3密などをさけなければなりませんでしたが工夫されていてすごかったです。せいげきなどコロナで自分たちはできませんでしたが、クリスマスらしい事ができてよかったです!! (小6 MA)

「中学校」例年とは違う形を考えて、クリスマス 祝会を迎えました。生徒たちの感想です。

「イエス様のお誕生」

中学生になって初めての劇は、小中学生皆で集まって、ができなくて「動画」という形になり、小学生は、劇をしないと聞いて残念だったと思います。その分、最高の形で見てもらおう、と決めました。私は照明係になりました。照明は、役者・朗読者を照らしてあげます。係は、全然話したことがないメンバーなので、少し心配でした。でも、K先輩が指示をしてくれて、とても大変でしたけど、楽しく終われてよかったです。時間があれば、すぐ話していました。だから前よりは、仲良くなったと思います。色々な話をしました。期末テストや野球の話をして、笑顔になってから自分の場所に戻りました。私は、他の分担もやってみたかったけど、今思えば、照明が私にとっての一番だったと思います。今年の劇は、いつもと違う状況の中で、皆で協力し、最高の劇ができたと思います。

(中1 MA)

今年の聖劇は、たくさんの役割がありました。私は朗読を選びました。もちろん、何かを作るのは好きですし、体を動かすことも好きです。でも、声を出すことが何より好きだからです。

でも、いざ朗読の練習をすると、意

外と難しいんです。私は、大天使ガブリエルと、天使の声を担当しましたが、舞台に出ずに気持ちを込めて声を出すことは、難しかったです。気持ちを込めて声を出すために動くにも、マイクが近くにあつて、物音が録音されても困ります。だから、私は台本を何度も読んで、その人の気持ちを理解できるように声を出して練習しました。マリアに呼びかける場面だったら、優しく声を出すようにします。この時、ガブリエルはマリアに「心配しなくても大丈夫だよ」という気持ちを伝えたいだろうと思ったのです。ヨセフの場面は、マリアよりも少し厳しめにします。ヨセフはマリアとひそかに縁を切ろうとしていたので、天使が「それは違うよ」と伝える場面だったからです。

今年の聖劇は例年とは違い、カメラで場面ごとの撮影になりましたが、台本の中の人の気持ちを理解するようにしたら、去年よりさらに、イエス様のお誕生を理解できたと思います。

(中2 YS)

「装飾担当」

装飾の担当になった。僕は装飾の中でも、クリブを作る担当だ。まず、自分の作るクリブの大きさや形を決める。一人で三体のクリブを作るため、中三の人と相談しながら決めた。次に大まかに切ったり、大きなものは二つの板を接合したりする作業だ。色々な道具を使いながら、想像よりも早く大まかなクリ

ブができた。そして最後の工程は削りだ。僕たちはこの工程を甘く見ていた。時間にも余裕があった。ものを究めるためには地味な作業が大切である。その地味な作業というのが削りの作業だった。四日続きのこの作業は、さすがに疲れるものだ。「これでいいんじゃないか」と、思ったこともあったが、中三の人たちの、より良いものを作ろうとする姿勢を見て、僕も最後までやりきることができた。完成したものを並べたとき、達成感を感じた。そこはまさにクリスマスが来たような雰囲気だった。装飾の担当になって、色々なことを経験できて楽しかった。

(中2 FY)

「最後のクリスマス祝会」

今回はコロナの影響で、いつもとは違い、カメラで劇を撮りました。私は化粧化粧係でした。舞台のメイクを初めて行うので、はっきりとしたメイクに最初は戸惑いましたが、回数を重ねていくごとに、上達していきました。コロナの感染予防で、色々な制限があったのが少し大変でした。衣装は、今回は新しい服を作らず、今までの服を使うことになりました。誰にどんな服が似合うか、サイズが合わない事などもありましたが、結果としてはとても良い劇が出来上がりました。それは、同じ系のメンバーや先生、手伝ってくれた人のおかげだと思います。そして何よりこの状況で出来たことが、とても良かったと思います。

(中3 SH)



今号は、澤邊嵩介先生にお話を伺いました。

—子どもの頃から教員志望だったのですか？

「大学では現代心理学を専攻しており、当初は臨床心理士を志していました。その過程で、ゼミ実習として教育現場を経験したことをきっかけに、毎日の学校生活の中で子ども達一人一人と深く関わることに、より興味が湧き教員を志望するようになりました。大学卒業後に通信制大学で二年間学び、小学校教諭の免許状を取得、今年で着任四年目です。

心理学で学んだことは、日々の子ども達との対話の上でも意識することが多くあります。特に、所属していたゼミでの応用行動分析の手法の一環（一人に着目して、行動を全て記録していく）に倣い、子どもと共に振り返りをし、気持ちを聞いていくようにしています。その場では余裕がない事もありますが（笑）、後から一人ずつ話を聞くようにし、子ども同士、子どもと教員、教員と保護者、いずれも距離感の近い本校ならではの関係性を活かして、一人一人見落とさずに向き合いたいと思っ
ています。どのように向き合っていくかを考える時間は楽しいものです。考え方も感じ方も得意分野も全く異なる子ども達が集まっ

て、ひとつのクラスができていくということ
を改めて実感する日々です」

—学校行事でもピアノを演奏される姿が印象的ですが、小学生時代には、ピアノ、習字、剣道など様々な習い事をされ、いずれも中高生の頃まで長く続けて来られたそうです。

「機会があれば何でも経験してみたい、また、長く続けてこそ見えてくるものがあるという気持ちでいます。でも、兄の影響で六歳から始めたピアノが続いたのは、先生が厳しくなかったからだと思えますね。楽しくできたおかげで、今でも趣味として続いています。

家庭では、本が身近にある環境でした。絵でも楽しめる百科事典を眺めることが、特に好きでしたね。小学校低学年の頃は、話すことがあまり得意ではなかったのですが、中学校や高校では聞き役であることが多くなり、知人友人の誘いや紹介から、色々な体験が広がりました。友人の勧誘で始めた大学の演劇サークルも四年続け、今も、キャンプ、登山、映画鑑賞、観劇など、楽しみは沢山あります」

—本校との出会いを遡ると、高校時代から現在も所属されている鎌倉吹奏楽団 Music Farm（創団者・団長は上戸基夫先生）での上戸先生とのご縁が教育実習に繋がりが、小川学園長先生のお声掛けから今に至るそうです。朗らかな笑顔からお人柄が伝わる澤邊先生、一つ一つの出会いや体験を大切に、まっすぐに向き合う時間の中で、柔軟な思考と揺るがない意志を育んでこられたように感じました。

【表彰】

○実用英語技能検定 三級 中2加藤

○日本漢字能力検定

十級 小1高木 七級・六級 小4清水
五級 小6川瀬 準二級 中3大山

○第59回大磯町ロードレース大会

中学生3km 男子3年の部 第一位 上田

STEPHEN'S NEWS

第二位 釘尾 第三位 グリーン 男子2年の部

第一位 宮崎 第二位 古川 第三位 畠山 男子

1年の部 第一位 大城 第三位 木村 女子2年

の部 第一位 八重沢 第二位 小早川 第三位

富樫 女子1年の部 第一位 村田 第二位 福森

○第88回全国書画展覧会

金賞 中3 上田 大山 松重 中2 相原 秋山

安孫子 小早川 西川 古川 中1 秋野 伊藤

大谷 佐藤 白神 徳田 福森 小6 草次 杉本

小5 原田 銀賞 小6 倉掛 七尾 小5 岩満

夏目 山崎 銅賞 中3 北澤 芹澤 夏目 中2

山下 中1 栗野 大城 國井 水島 小6 大城

金原 川瀬 小4 近澤 入選 小4 入月

【編集後記】

聖ステパノ学園でこれから「本当は」何を
していくべきか、考える日々です。(一)

代表者 学園長 小川 正夫

発行者 聖ステパノ学園小学校・中学校

ステパノだより編集委員会

〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯868

TEL 0463-611-1298

FAX 0463-611-9739

http://www.stephen-oiso.ed.jp
二〇二一年一月十五日（金）発行 第250号